神様が家出してしまったようです。

莉央沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様が家出してしまったようです。

【Ｎコード】
Ｎ３００１Ｆ

【作者名】
莉央沙

【あらすじ】
この世界は、神様が造り動かしています。そんな神様をお手伝いする三人の小さい神様。わりとのほほぉんと平和に生きていましたが、ある日突然金憂が家出してしまいました。金憂が居なくては世界の全てが崩れてしまう・・・。そこで３人の小さい神様たちは金憂を探す旅に出ますが・・・。三人の性格は問題ありまくりで！？とてつもなくグダグダな感じへ、

はじめに

この世界には、神様がいます。

世界そのものを長い時間をかけて造り上げ、今も動かしている神様が。

その神様の名前は金憂（きゆ）

地上に名前を知っている人は一人も居ませんが、全ての人がその存在を知っていました。

神様には子供が、正確にいえば少し違う、

天使ともまた、違う

三人の子供がいました。

一番年上の子はクロムといいました。二番目の子はアルミナ。末っ子はセレン。

この3人は、神様の手伝いをしたりしていましたが、

4人ともわりとのんびり過ごしていました。

そんな世界の、神様たちのお話。

はじめに（後書き）

あぁ、うっかり前にあったの消しちゃいました（笑）

一応ギャグっぽくしていきたいつもりです。

面白いかは・・・・微妙！

ネタがある限り続きまくります。

暇でした読んであげて下さい。。

のほほんな日々が終ったようです

空の上にある神殿。その露台の手すりの上でのほほぉんと日向ぼっこをしているのはクロム。
茶色の混じった黒い髪は腰まで、毛先は緩くウエーブしている。
背には白い羽。
白に黒いレースの服。
若干たれ目ぎみな目はおっとりとした印象を与える。

「はっははは～跪くがいい愚民どもぉ！！」

突然、どうしたの！？なセリフを吐きながら露台に飛び込んできたのはセレン。
走って来たのか焦げ茶の短い髪に妙な跡がついている。

「今日は、何の遊びなんだよ・・・」

「うん。今日は、えっぐし」

言葉の途中でくしゃみに遮られる。
羽毛アレルギーなのだろうか。。
可愛いらしいチェックのワンピースの裾で鼻をかむ。

「せーちゃん。誰がお洗濯してあげてるとおもっているのかな？」

笑顔なわりに脅迫めいている。

「くろちゃんが羽しまえばいいだけだよ。んで今日は暴君ごっこだよ♪くろちゃんは王妃の役ねぇ」

スイっとクロムの羽が消える。
セレンのことは好きらしい。

「そいでねぇアルミナちゃんがぁ」

そこまで言った時に、本人が駆け込んで来た。

『あ、愚民』

2人が声を揃えて言う。

「突然なに？」

そう肩を弾ませて言うアルミナはクロムとは対照的。
ストレートの短い黒髪につり気味の目。
クロムと色違いの服。
今までセレンと遊んでいたのか、白い羽は見当たらない。

「いいから、ヤバイの！マジで大変！！金憂の阿呆がぁ」

そういって一枚の紙を差し出す。

金憂様は家出したようです

『　生きる気力が無くなった故、地上の何処かへ行くことにした。
探すでないぞ。
世界は、まぁクロムが動かしておいておくれ
追伸　金憂(きゆ)が居なくとも喧嘩するでないぞ
金憂　』

「い、遺書・・・・？」

セレンの率直な感想。

「ばか！こんな話の最初ッから遺書書かれてたまるか！！違うから、きっとただの家出だから！そう思い込め暗示をかけろ！」

「遺書ちゃう。これは遺書ちゃう。単なる家出」

本当にセレンがブツブツ言い出した。
セレンもクロムの言う事は聞くらしい。

「家出だとしてもまずいよ。もぉ金憂のあほぉ～地上でサメにでも襲われてしまえぇ」

アルミナが遺書、もとい置手紙をグシャグシャに丸めながらここに居ない金憂に向かってヒドイ事を言っている。
あっ。
とセレンが声を上げる。

「隊長～、神殿内に金憂の気配が全くありません！」

ばっしと敬礼。

誰が隊長なんだか・・・・。

「もぉいい加減にしろよ、あのアンポンタン（どうしょも無いアホの意）。奴が居なくちゃ太陽は動かんし、風も吹かんし、異常気象だらけだし！世界の殆どが停止するっての」

「クロムが動かせってよ」

アルミナの口調が、クロムに対して冷たい。

「お前もアンポンタンだな！出来るかそんなこと、んならアルミナがやってみろよ」

「無理」

「まぁ、まぁ2人とも落ち着いて。このままじゃまずいから、連れもどさなきゃね♪首に縄かけてでも♪」

縄おかけるかは置いておいて、そうゆうことになった。

金憂がココに居なくては、世界の殆どが止まってしまう。

壊れてしまう。

地上に着いたようです

「ふぅ、久しぶりに地面に足がついたねぇ」

嬉しそうなセレンの声。

「空気が濃いぃ、酸素おおいのはやっぱ良いね！深呼吸しよ」

深呼吸始めるクロム。

「あぁ、なんか変な感じだね。最後に来たのは何時だっけ？？」

ココは地上の神殿。
はっきり言って、住めるようなモンじゃない。
ただ神様の像（似てない）が安置されていて、お供え物的ななにか（おもいに酒やその時期の収穫物）が置いてある。
要するに、人間が祈る対象として造られたもの。
のはずだが、何故か地上に降りようとすると必ずここに出てしまう。
逆に帰るときもここからしか帰れない。

「今何置いてあるかな～♪」

るんるんと、像の前に置かれた食べ物をあさるセレン。
完全に地上に来た目的を忘れている。

「果物系ないぃ？」

そこにアルミナが加わる。

「こら。そこの馬鹿２人！目的忘れるなよ！」

クロムが叱る。

「もぉくろちゃんは真面目だなぁ。腹がすいてはいいクソはでんよぉ」

セレンがブドウを食いながら、微妙に間違ったこと言っている。
下ネタに走り気味。

「せーちゃんそれ違う。戦だよ！可愛いんだからそんな事言っちゃだめ！！しかもあんましおもろないよ！」

「クロム、酒あるよ。飲みたいでしょ？ここは一つ食っとけ」

梨を丸かじりしているアルミナがビンを突きつける。

「・・・・・飲む」

お酒大好きなクロムはおんとし１５００歳（見た目は÷１００）

子供の飲酒はいけません。
とは言えないお年。

神殿（地上）を追い出されたようです

「こらぁぁぁぁぁ！！！」

イロイロあさって居た3人娘は、突然知らないおっさんに怒鳴られ、

『あぁ？』

と感じ悪く振り返った。

「あぁ、じゃないだろ！神様のものを食べたりしたら、いけないだろ！！その歳になっても判らないのか！？全く。どんな教育を受けたんだか・・・」

その神様に創られて、育てられた結果がこれなのだ。

「うっさいじじぃ、クロちゃんビームだすぞ」

クロムは相当飲んでいる様だ。空になった酒ビンが4，5本転がっている。

「あはは♪くろちゃんビーム何か出せるの？」

怒られても尚、食い続けるセレン。

「ウチは知らんから」

逃げようとするアルミナ。

おっさんの脳内でなにかがブッツリ切れた。

ボカッと、クロムが殴られた。
グーで。
そして飲みかけの酒瓶をひったくる。
「子供が酒なんか飲むな！そこの2人も、態度悪すぎる！そこに正座する！！」
おっさん血圧上昇中。
「じじぃ、怒ると脳内の血管はれつすっぞ。歳なんだから、血管も脆くなっちょるよ」
クロムが新しいビンを開けつつ言う。
おっさんの肩が怒りで震えている。
注意がクロムに行っている隙に、アルミナとセレンがこそぉっと出て行く。
おっさんがもう一度怒鳴ろうとしたところで、
「せちゃーん、アルミナ、走れ！」
クロムはそう叫んで、開けたばかりのビンの酒をおっさんの顔面にぶっかけて走り出す。
後ろでおっさんが「くそガキぃ～」などと怒鳴っている。

道が分からなくなってしまったようです

地上の神殿から、脱兎の如く逃げてきた3人娘。
猛スピード走っていたわりに、息一つ上がっていない。

神殿の外はそれなりに人の多い市場。
地上の神殿は、ある街の中心にあった。

「ふぅ、私たちにくれたモンなんだから別に食ったっていいのにねぇ」

もぐもぐ。
セレンはまだ食っている。

「・・・。羽以外見た目なんかその辺の子供と変わらんもんね」

アルミナがセレンの食べかけの果物を横から取ってかじる。

「・・・・あ！？」

「なんだよ馬鹿クロム」

「くろちゃんどうしたン？」

「馬鹿って言う方が、馬鹿やから。　大変なんよ！道とか全然わからへんわぁ」

「わからんって、何で？」

セレンが小首を傾げる。

「だぁかぁら、ここ（地上）に来たの何年ぶりだと思ってんの！？今周り見渡しても分かるっしょ？前来た時と、建物とか道とか、ちがうやん！！」

あぁとアルミナが手を叩く。

「いくら道覚えてても、建物とか道が変えられてたら分かんないな」

「これじゃあ、探しようがって・・・くろちゃんはどの辺に金憂（きゆ）がいると思うの？」

確かに。

そのへんのあてが無ければ、世界全てを探さなくてはいけなくなる。

「ん～。いくつか、ここは？と思う所が有るけど・・・。今現在の所在位置が分からないんよ」

よし♪

と今度はセレンが手をたたく。

「道を分かっていて、頼むか脅すかしてついて来そうな人を生け捕るか！」

『生け捕・・・・！？』

心なしか楽しそうなセレンちゃん。。

行き先ついて話をしているようです

「おい。せぇちゃん。とりあえず縄はしまえ」

るんるんと罠をはろうとしているセレンをクロムが軽くつつく。

「何で？」

「行き先によって、生け捕る人物が違うから。アホクロムにどこ探す今説明すっつたとこだろ」

「あほっていう奴があほだ。まぁ聞いてね。くろがぁ金憂(きゆ)居そうだナァと考えてんのはここねぇ」

と言って木の枝で地面に文字を書き始める。

魔王の所

冥府

王水の所

地獄

・・・・などなど。いづれにしても普通の人間なら生きているウチなら行けそうも無い場所ばかり。

それにしても丸っこい字だ。

「んまぁ、金憂が行きそうなトコなんてこんくらいやねぇ。そう思わん？？」

土の上の文字をじぃと見ていたアルミナがぼそぼそと呟く

「王水のところいくの・・・？」

「ん。一番金憂が居そうやん」

がっと、アルミナがクロムの手を握る。

「クロム、好き！！」

愛の告白（？）

「うん。くろはアルミナ嫌い」

アルミナは『王水』の所に行くのが物凄く嬉しい様です。

それにしても、と文字を見下ろしたセレンがにこやかに言う。

「魔王のとこ行くんだぁ♪またくろちゃんとアルミナちゃんが暴走しそうで楽しみだねぇ！」

また・・・。

って前に何をしたのだろう。

「うん。楽しみ。あの腐れハゲ筋肉だるまをもっかい泣かせられると思うと、道が分かんない事なんか根性で何とかなりそう！」

何故かガッツポーズなクロム。

そして何故か舌打ちをするアルミナ。

「あぁ、魔王のトコならアイツに道を聞かないとだな・・・・」

アイツを捕獲したようです

ここはちょっと道から外れた森の中。
木々の間から日の光。
辺りを見渡せば可愛い花。

が、

不穏な空気をまとった少女が2名。
クロムとアルミナ。
（オーラが黒いわりに白い羽根つき）
何故か足元にはクロムより数歳年上の（見た目の話）少年が白めむいて倒れている。

「ったく。いたいけな少女に鳩尾に一発入れられたくらいで小一時間気絶している男が使えんの？」

腕組みをして地面に転がるモノを見下ろすクロム。

「はっ、四桁も生きておいて少女か？　ほんとだらしない奴」

クロムと一緒にソレを見下ろすアルミナ。

「てめぇも四桁生きてんだろ。アホが」

「おぉいおきてぇ～」

羽毛アレルギーなセレンは、鼻垂れ防止に鼻栓している。
せっかく可愛いのに台無しである。

ぺちぺちと、セレンが白目むいた人物の頬を叩く。
・・・・。
起きない。
こんどはアルミナが、ガっとあごを掴んで口を開けさせ、クロムがドバドバと酒を注いでいく。
「ぐへッッ！！」
倒れていた人物が勢い良く上体を起した。
一体、この人物が誰かというと・・・・・・
～小一時間前～
3人娘は、森に近い一軒の小さな家のすぐ横の茂みでごそごそやっていた。
「ここに勇者(あいつ)がいるの？」
「いるよぉ、まぁ勇者名乗ってる奴なんて世界中にぎょぉさんおるけどねぇ」
「で、ここの人が現在地から一番近いんでしょ??」
ん～と言いながらクロムは赤い革表紙の本をめくる。
「そうみたい。でもこいつ今の所、自分で『そうしよう』って決めただけの勇者で周りが認めたわけじゃ無いから、不安やなぁ・・・」

どうやら本の中には『人間』の情報が書き込まれて居るようだ。
「もお何でもいいって！道さえ分かればいいんだから。クロムのアホ。早く捕らえてこいや」
何だかアルミナの最後のほうの言葉はゴニョゴニョと聞き取りづらい。
そうこうしているウチにドアが開く音がした。
三人がそろぉっと茂みから顔を覗かせてみると、
年のころは１７、１８。
こげ茶の短い髪に、空色の目。
筋肉質の長身。
背には大振りの剣。
いかにも青年らしい快活ま表情。
そんな男が出てきた。
「クロちゃん、ＧＯ！！」
めちゃくちゃ楽しそうなセレン。
ちっと、舌打ちをするクロム。
「くろは筋肉野郎嫌いなんだけど・・・・」
そう言い終らないうちにクロムは茂みから飛び出した。
飛んだ、というのは本当に白い羽で飛んだのだ。
そのスピードのついたまま、
今外に出て来たばかるで、油断し過ぎの人間に、
鳩尾に一発。

そして今に至る・・・。

勇者は目が覚めたようです

（あぁ・・・何これ！？）

意識がぼんやりしている。

（腹いた！！）

先程、家を出たところで茂みから何かが飛び出してきたのは覚えてる。そしてその何かが当たってぶっ倒れたのも、今思い出した。

（ってかここ何所？）

『おぉいきてぇ～』

遠くから、近くからかも知れないが声が聞こえる。ペチペチと軽い衝撃が頬にくる。

まだ体は起きてくれそうにない。

そのうちに、ガツっと無理やり口を開けられた。そして何かが流れ込んでくる。

（熱っ！何これ！？酒！！？？）

「ぐへッッ！！」

さっきまで起き上がれなかったのが嘘のようにあっさり上体を起せた。

（えっと、ここは・・・・）

辺りを見渡せばノホホンとし過ぎている位平和な森の中。
きょろきょろしていた視線が自分を見下ろす二つの影で止まった。

（うっわぁ、可愛い子・・・）

一人はおっとりした顔つきのいかにも大人しそうな、長い髪の自分よりいくらか年下の少女。白の服にクロのレース。
もう一人は対照的に黒い短い髪にしゃっきりした顔立ち。黒い服に白のレース。
２人の共通点は白い、いかにもフワフワしていそうな羽。

「は、羽・・・！？」

（どうしよう、俺死んだ！？ここは天国！？）

そう考えればここがこんなにものどかなのも頷ける。

「このアンポンタン。天国じゃねーよ」

一瞬耳を疑った。

（何も言って無いのに！ってかアンポンタンって何！？）

「クロ男嫌い。天国なんかやってたまるか。つぅかねーよ天国」

「地獄は有るけどな。そしてクロムは地獄に堕ちろ」

「んだとこら。てめぇも一発殴るぞ」

（喧嘩し始めた！？ってか2人とも見た目と喋り方があってねぇ！！）

「あ、あのぉ～」

そろそろ事情を聞こうと声をかけてみる。

『あぁ！？』

（感じ悪！！）

そう思ったときに背中に何かが負ぶさってきた。

「う、うわ！」

振り返れば１０歳そこそこのちっこい少女。

「クロちゃんとアルミナちゃん仲悪いんだよぉ♪」

チェックのワンピースに何故か鼻栓。
この子には羽がない。

（本当にこれはどういう状況・・・・？）

背中にちっこい子を引っ付かせたまま途方にくれた。

自己紹介をしているようです

「で、君たちは何です・・・？」

ひとしきり喧嘩（殴り合い）をして気が済んだのか、２人の対照的な少女と背中に負ぶさったままのちっこい子と俺で、正座して円く座っている。

「見りゃぁわかんだろが」

「さっしろ。餓鬼」

「あはは♪」

要領を得ない。

「すいません。分かりません」

（つぅか餓鬼って、お前らの方がチビだろ）

「はぁ、しょうないね。見た目でしか人を判断できんアンポンタンな小僧に自己紹介してやんよ」

おっとり顔なのに何だろう、この喋り方の違和感は。

「クロはクロム。嫌いな物は男と、ハゲと筋肉と勇者。あとアルミナ」

「ウチはアルミナ。嫌いな物は馬鹿な男と、クロムとクロムとクロ・

・・」

バシン。

めっちゃスマイル。もちろん小さい子。2人の殴り合い（再び）を無視して話す。

「わたしはセレン～、好きなものはいっぱいあるからわかんない♪」

うん。まともっぽい。

「えっと俺は・・・」

この流れは名前ぐらい名乗った方がよいのかな？

『言うな』

クロムとアルミナが同時に振向いてずびしっと言い放った。

『男の名前なんざ、脳内にインプットしたくない』

これまた息ピッタリ。恐ろしい・・・。

「名前分かんなきゃ不便だろ」

小さい声で抗議してみる。すると、クロムがコイコイとセレンを手招く。三人でなにやら内緒話を始めた。

「二郎に決定です」

「は？」

「だから名前」

「や、だから。っつか太郎ですらないの！？」

「お前なんざ二郎で十分じゃボケ」

「宜しくじろぉ♪」

「名前付けるにしてももっと他に無いのかよ！！」

『・・・・。』

こそこそ、こそこそ。
また相談中。

「二郎がやなら【くそまみれ】な！！」

女の子の思考回路か！？それが！！？？ぐっじゃねえーよ、いい顔すんな！

「ちなみ原案はセレン」

おぉぉい！見た目に反してあなたですか！

「もう、二郎でいいです・・・。ところでクロム、あの」

バシン。（平手打ち）

「年上なんだから『さん』をつける」

「ウチには様をつけろ！」

・・・。

「えっと、クロムさん。なんで俺をこんなトコに・・・？」

選択肢が出されたようです

いやいや！！
まさか神様が家出！？
ってか生きる気力が無いってなに！神様がそんな事言ったら人間はどうすればいいんすか！？

ここまでの話を聞いたらそうなるらしい・・・。
でも家出って・・・・。

「で、俺に道案内をしろと・・・？」

こくりと頷く3人。
や、でも・・・・

「君たちも神様みたいなもんなんじゃないの？分かんないの？？」

一回羽見たら否定する気も起きん。

「あんなぁ、二郎。地上の地形なんて数百年あればかわんの。クロ達は目的地が分かっていても、道自体が動いてンの。おわかりぃ？」

おわかりぃの部分がめちゃくちゃ憎らしい。
そしてさっそく二郎ってよぶんだね。。

「はい。拒否権ありますか？」

年上発言しているが小さい女の子3人連れてはキツイ。
手を上げてみたり。

『あるよ』

不穏な空気。

「お前が選べる道は三つ」

ピコンとアルミナが人差し指を立てて不適に笑う。

「一。人生こんなモノと諦めウチらの下ぼ・・・道案内になる」

今、下僕って・・・。

「二ぃ。この場ではっきりきっぱり断って、頭かち割られるぅ♪」

純粋な笑顔が怖いです・・・・。

か、かち割るってセレンちゃんがですか。。

「三。クロ様にボコられて魔物の巣に放りこまれる」

クロムがニヤリと笑う。

ってか一以外全て死ぬんじゃ・・・・。

『さぁ、どれがお望みぃ？」

・・・・・。

「一番がいいですっっ！！」

半泣きで宣言。

クソぉ、ホントに人生上手くいかねぇ。

異変が起きたようです

「疲れた・・・」

俺の右側で腕にぶら下がる様にして歩いていてセレンがぼそりと言った。

・・・。

このしがみ付いて来てるのは捕獲のつもりか？（ちょっと前にダッシュで振り切ろうとしたら足首掴まれて顔面強打した）

クロムとアルミナは並んで前を歩いている。

５０歩に一回の確率でどちらかが攻撃している。（例　足をふむ）

未だに平和すぎる森の中。変わった事といったら夕方になったことだいぶ奥まで進んだこと。

（案内しろってのに何で前を行くかなぁ・・・）

「クロ、ムさん。セレンちゃんが疲れらしいっす」

セレンはちゃんづけでいいよ、と言っていた。

ピタリ、と前を行く2人の動きが止まった。そして回れ右をしてこちらに駆け寄ってきて、背の低いセレンに目線を合わせる。

「せーちゃん疲れたン？んじゃ今日はココで休も。ええだろアルミナ？」

「セレンが疲れたのなら良い」

何でこんなに甘いのだろう。俺にももう少し優しさという心遣いを

してくれ。

「じろぉもいいよね??」

セレンが上目使いで見てくる。

「お、俺はいいけど・・・こんな何も無いとこでですか・・・」

「んだよ、二郎おめぇも男だろ。野宿ぐらいいいだろ。アホ」

「阿呆」

何だよこの2人は・・・・

「俺は大丈夫だけど君た、」

言いかけた所で、カチっと何かカラクリが動きを止めたような音が響き渡った。いままでふざけた様にしていた3人娘が真顔になってふっと顔を上げる。

一瞬の沈黙。

空気の流れまでもが止まったような。

すぐに、地面が揺れ始めた。

徐々に揺れは大きくなり、世界が傾くんじゃないかと思うくらい大きな揺れが来た後、

ピタリと止まる。

「切れた・・・」

クロムが静かな声で、天を見上げて呟いた。

止まってしまったようです

「あ〝ぁぁ、もう。金憂の阿呆！！」

揺れがピッタリと止まった後に、アルミナがその場にずるずると座り込みながら叫ぶ。

「一日くらいもつと思ったのにねぇ・・・」

セレンまで困った顔でしゃがみこむ。

クロムはまだ天を見上げている。

「な、なんだよ、今の何！？」

俺はあたふたと、３人の顔を見回す。

「金憂の力絶えちゃったのぉ」

「金憂が居なくなってもしばらくは勢いのまま世界は動くんだよ」

「その勢いが今、止まった」

（止まった・・・？）

「止まると、どうなるんだよ」

クロムが真面目な顔のまま語る。

「言葉のまま、停止するの。日は動かない。月は昇らない。風は吹

かない」

さっきまでとはまるで違う、訛りの無い喋り方。
地面に腰を下ろしたままのセレンも困った笑顔で言葉を紡ぐ。

「止まるだけならまだいいよ。そのうちバランスが崩れて変な方に動くの。金憂が、神が創り上げたもの全てが、ね」

「人も？生きてる物も全部が？？」

これにはアルミナが答える。

「人は最後。一番神の影響を受けずに存在するから。自然が崩れ始める。その次に神獣。見たことある？金憂に近い物から順番に」

・・・。

それじゃあ今目の前にいる三人の少女達はどうなるのだろう。
そんな疑問が浮かぶ。

「クロ達は止まらんよ。金憂が創ったモノだけど、人間とは作りが違うけん自力で動いてんの。見くびんなよ！！」

ニヒヒとクロムが笑う。
アルミナとセレンも『なんとでもなる』という様な表情を浮かべている。
少し安心した。

「んでだ、思ったより金憂がヘボかったから予定変更！！」

「じろぉ道、教えて♪」

「休み無しで歩くぞ」

二郎に行き先を教えてるようです

「な、なぁ、一ついいか？」

気になる点があがったので質問して見る。

夕日の赤い光の中で四人で行き先について話している時のこと。

「どう考えても、俺この場所しらねぇよ？？」

地面にはクロムが書いた（汚い字）行きたい場所が箇条書きされている。その一つも行き方が分からない物ばかり。

（つか普通ぅいけねぇ所ばっかり・・・）

「大丈夫だて」

地面に文字を書いていた木の棒でつんつん突いてくる。

「運命って物があんだよ。な？」

クロム同意を求めてアルミナとセレンを振り返る。

「なっ♪」

セレンが可愛らしく頷く。

「二郎は、勇者でしょ。まぁまだ何もしてないけど」

アルミナは最後のほうにぼそりと傷つくような事を言う。

「って事で、二郎が知らんくても運命どうりにいけば『勇者』は目的の場所にたどりつけるンよ」

そういうモノなのだろうか・・・。だとしたらその運命だとか言う物は一体誰が決めているのだろう。

「あ、そうそう。今緊急事態だから最初に『王水』の場所に行かな・・・」

王水(おうすい)と言うのは人の名前だろうか??

「やっぱ全然分かんないっす」

「じろ!じろ!!この国で一番高いお山って、この森ずぅっと行った先にあるやま?」

服のそでを引っ張りながらセレンがはしゃいだ声を上げる。

「え、いや。違うよ。反対側の方角に見える山。まぁ数年前まではこの先の山だったけど。あと『じろ』って呼ぶなよ。もう犬の名前みたいじゃないか・・・」

セレンの言ったとおり、この先の山は数年前まで一番高い山だった。何故一番ではなくなってしまったのかと言うとその山はとても沢山の鉄が出た。そして鉄を掘り尽くした。山の内部が穴だらけになって崩れた。結果前より平べったい低い山になった。

「今なんか関係あんの?」

う～んと三人が腕組みをして何事かを考えている。

「あ、でその山って山頂付近に放置された古城があるでしょ？」

「多分・・・。あぁ、あったあった！！前は観光に使おうとしてたらしいけど、昔っから怪談話があるからナカナカ人が行かないすっげぇ古いやつ」

怪談！？っとクロムとセレンが色めきたつ。アルミナは表情は変えずにしゅばっと両手で耳をふさぐ。

「んじゃあ二郎はその話てよ。寝る前の話がてらに」

「してしてぇ！！」

寝る前のお話って・・・散々年上とか言ってなかったかこいつら？・・・。まぁいいか。

「んじゃぁ話すぞ？」

笑われたようです

†

え、
僕が創られた理由？
ちゃんと分かってますよ。
金憂さまがそう創ったのでしょう。
別に拗ねてません。
そういう役目ですから。
でも不公平な気がするだけです。
だって僕はとてもお慕いしているあなたをイツカ壊す為に創られたのに、あの娘たちは人間のように自由に生きて何かを愛でて存在するんです。
だから拗ねていませんってば！！
金憂さまの決めた事です！！不満なんてありません！！

†

『あはははっっ』

話さなければ良かった・・・。
おれ的には子供の頃聞いてめちゃくちゃ怖かったのにこんな大爆笑されるとは思わなかった。

（真剣に怖がらせようとした俺がバカみたいだ・・・）

「うける～。良くあるわぁそーゆぅ親が子供にする『しちゃいけない話』！！」

二郎が語った話は、古城に子供がこっそり入り込んでそこに住むナニカに襲われて帰ってこない。そんな話。

「じろぉ顔が受けたよ♪」

セレンの励ましはなお更良くないとおもうぞ。。

「十二分に怖いよ！！ねれないじゃん！」

アルミナだけが耳を塞いだままひぃひぃ泣いている。
なんか達成感。

「あはははは、はぁ、息できねぇ」

クロムは大口開けて笑いすぎ。
顔の下から光を当ててもっと効果を出すべきだったか・・・？

「じゃ、明日そこ行くから！おやすみぃ」

そういい残してぐてッと地面に寝っ転がる。

（マジでここで寝るんだ・・・）

渋々3人から少し離れた場所に座って眠る事にする。
その間、時間は経つのに夕日は全く動かなかった。
うとうとと、夢と現を彷徨ってるうちに誰かがころころ転がってきて横で寝息が聞こえ始めた。

息抜き

じ「おぉーい、息抜きってなんだよ。誰のだよ」

り「僕のだよ悪いかっ！？」

ク「んだよ悪いかっ！？」

じ「何でクロム、さんまで俺に攻撃すんの！！」

り「え、だって・・・クロムはねぇ」

セ「書いてる小説の中で一番りおさに近いんだよぉ♪」

じ「マジで？作者がそんな最悪な性か・・・、クロさん怖いっ！！そんな顔すんなよ！」

ア「ちなみにウチとせーちゃんは親戚の仲良い女の子がモデルだ」

セ「うん。まぁそれは良いとして、息抜きも重要だよ？」

ク「そうそう。頑張りすぎるとどっかの神みたいに表情無くなるは、気色悪いほど色白くなるは、目が死んでるは、人のこと人形だとか言いやがって・・・」

じ「クロさん途中からただの愚痴っす！！それ誰の事？金憂さん？？」

セ「じろぉの、馬鹿ぁぁぁぁぁ！！」

じ（は、初めてセレンに攻撃された・・・）

ア「良かったな二郎。目潰しじゃなくて。セーちゃん基本は目潰しだから・・・」

じ「なにその怖い基本。じゃー金憂さんってどんな人・・・？」

ク「金色目。はい」

ア「銀髪。はい」

セ「色白」

ク「羽生えてる」

ア「年齢不詳」

セ「性別なし」

ク「一人称が自分の名前」

ア「ウチ的には中身はおっさんだと思う」

セ「あぁ、おしぼりで顔ふくもんね」

ク「でも見た目的ににゃぁ、女寄りだよなぁ」

ア「しかも少女みたいな？ねぇ？」

セ「笑い方とかね」

クアセ『こんな感じの神様(ひと)だけど？』

じ「えっと、イメージ掴めない・・・」

息抜き（後書き）

金憂がどんな人か？みたいな感じで作ったモノです。
アレだけじゃぁイメージ掴めません＋．　。（●´Ｉ、）ｂ　。＋．　。

あ、最後に、『二郎いじめネタ募集！！』
じ「かってな事すんな！募集できねーよ！」

登山を始めたようです

†

彼、は明かりの灯った蝋燭立てを持って延々と続く廊下を、壁に取りつけられた照明に火を灯しながら歩いていく。
彼の通った後には光の道が残っていた。
他に住んでいる者が居るわけでは無いのだが、夜になると光を灯して歩く。
ひたひたと、彼の裸足の足音が聞こえるほど、そこは静かだった。
だからすぐにその声は聞えた。数人の子どもが半泣きで話し合ってる声。彼はため息をつく。彼の城(いえ)に勝手に入り込んで出る道の分からなくなった奴らが時々居るのだ。
勝手に入ったのだから、自業自得だ。でも彼は一言だけ助言してやった。
「明かりのある廊下を進みなさい」
突然の声に驚いて、更に奥へ逃げ込んでいく子どもと泣きながら言われたとうりに駆け出す子。彼は奥に行った子を呼び止める気は無かった。
蝋燭をもって、真っ直ぐ進む。

†

はっきり言って、寝不足です。体力持ちませんっ！
けっきょく殆ど眠れなかったのだ。あぁ、寝れそう・・・。と思ったら何らかの原因で現実に引き戻される。
何らかの原因は、
横に転がってきたアルミナの寝言がうるさい。（怪談話をした事を後悔）

セレンの寝相が悪くて気が抜けない。（どっかに転がって行きそう）
クロムが明かりが有ると寝れないと、ずっと寝返りをうっていた。
上同様、俺もずっと夕日が射していて気になった。

その癖、予告どうり休み無しのぶっ続けで歩いている。
飯も食わないで。
ってか、今はホントに朝??

「・・・。本当に休憩なしで（ほぼ）頂上まで行くんっすか・・・」

「行くさ」

そうですか・・・。
アルミナとセレンは全然疲れて居なさそうに、スイスイ斜面を登っていく。
何故かクロムは足が重そう。俺より半歩後ろを歩いている。

「クロさん?どうしたん・・・っっ!!何でもないです!」

心配して声をかけたら鬼のような形相で睨まれた。
心配したのに・・・。
少し上の方からアルミナとセレンがコイコイと手招きして止まっている。
よこっらよこっらとすぐ脇まで斜面も駆け上がると、アルミナが耳打ちしてきた。

「クロム、機嫌最悪。話しかけんな」

「ど、どうして」

「二日酔い」

アルミナが肩をすくめてみせる。
あぁ、そいやぁ最初起された時（鳩尾に一発喰らったあと）酒瓶持ってたなぁ。

「じろも疲れただろぉし、もちょっと上まで行けば平らなトコ有るから休も？」

セレンにも羽が生えてればいいのに。切実にそう思った。
そうしたら完璧天使なのになぁ。

色々な発見があったようです

クロム曰く、今お昼。な時間まで登り続けた。
そして分かった。夕陽は、疲れた感を倍増させる。だってほら、あれじゃん？今日一日の仕事を終えて、これからくつろぐぞー。って時間帯だもん。

それに、もうちょっとがやたら長かった。

「あ〝ぁ〜〜」

平らな場所を見つけて休憩に入ったら、ため息が出た。

「なんだよ、二郎、情けない」

「人間にはちょっとキツイよね」

神様っ子たちは息一つ上がっていない。（クロムは例外。魂が半端抜け出ていそう）
とゆうか、俺はけして体力無い方じゃない。むしろ平均以上だ。

「君らは、なんで、そんな、元気、なの・・・」

セレンとアルミナは顔を見合わせて、

『鍛えてるから』

鍛っえ？？
神様のに近いとかだからではなく！？努力、努力なのか！！？？

「アルミナちゃんなんか、１２００歳から今まで毎日欠かさず運動してんだよ♪」

今までって、今何歳なんだよ・・・。

「ふっ・・・二百年間体力づくりしてるからなっ！たった１８のガキと一緒にするな！」

新事実発覚！！いったい俺の何倍生きてんだよ。

「ちなみに、クロちゃんは運動嫌いの本読みっ子♪在る本は片っ端から～。だから一番知識豊富だよぉ」

あ、そこだけ見た目のまんまなんだな。

それに納得。こういっちゃ何だが、クロムとセレンに比べてアルミナは目に焼けてるのか。

「みずくれぇ～～」

すっかり忘れていた二日酔いのクロ様がゾンビっぽく寄ってきた。

「え、水って言われてもこの辺に川は・・・」

はい。っとセレンがガラスの器を差し出す。って、あれ？今どこから・・・・。

「お茶も有るけど、水でいいか？？」

アルミナが人数分の杯を両手で持ってきた。

俺は更なる新事実に気づく、俺の剣以外、荷物なんもねぇぇ！！

ちょっとした疑いを持ったようです

荷物が全く無いことで、うろたえたのは俺だけだ。

「平気だよぉ？クロちゃんが『本』持ってるから、神殿から移動出来から」

セレンがクロムから赤い革表紙の薄い本を受け取り、地面に並べた器の上で本を開き背表紙をバシッと叩くとざばっと、器に水が並々と注がれている。

「！？すごっ！！何今の？どうやったの！！？？」

「これはウチらが造りだした訳じゃないから。それだけ言っとく。『無』から作れるのは金憂だけだから」

アルミナが器の一つを俺に寄越しながら言った。

「まぁ要するにね、神殿に準備しておいた物をこの『本』を通じて瞬間移動させたと思ってね」

本と水をクロムに渡しながらセレンが振り返り言った。

俺はここでもう一つの気づいた事を問うてみることにした。

「うん。まぁなんとなく理解は出来たけど、君らが荷物の心配してないのも理解したけどな。俺さぁ、家んなかに色々準備してたんだよね。そんで、財布だけは懐に入れて外に出た訳だけど・・・」

一回言葉を切った。

「財布が見当たんないの。知らん??」

『知らない』

アルミナとセレンが息ぴったりに微笑む。

「ぷはぁ」

クロムが水を一気飲みして、息をついた音が重なった。

「じゃあ、俺が家の前でぶっ倒れた時、その辺に落ちて無かった?」

『見てないよ』

またまたニッコリ。

「・・・・・。」

「・・・・・。」

一時その場が凍った。クロムの水をガボガボ飲むおとが聞こえた。

「さて、それは置いておいて、クロムのアホンダラも復活したみたいだし、先を急ごうかっ!!」

がばりと立ち上がって、セレンの腕を引きながらアルミナが棒読みに言った。

クロムが、よっこらしょ、とか年寄り臭い（千歳超えてるけど）事を言って立ち上がるのを視界の端で捕らえた。

「じろ、あともうちょっとだからねぇ」

三人してそそくさと先を歩き始める。

犯人確定の様だ。

息抜き（予備知識）

じ「おれ、ってきりい息抜きって十数話に一回だと思ってた・・・」

ク「そのつもりだったけど・・・、思いのほか息が続かなくて、ね」

セ「でもね、ほら見てっ！！予備知識！！これから王水に会うからね。お勉強しておこうと思ったんだよ。そうだよね、酸化アルミニウムちゃん？」

じ「誰の事？？」

ク「アルミナの別名。アホの二郎は気づいてった？クロ達の名前金属なんよ」

じ「へぇ、知らなかった・・・・（つかアホって）」

ク「ほれ、アル自己紹介せぇよ」

ア「・・・。白い粉末で、アルミニウムの原材料。研磨剤・耐火材料などに使われる」

ク「クロムは別名クロームつってね、銀白色の光沢があって、めっちゃ強い金属なんよ！んでな空気中水中でも酸化されないん。んでめっき用・合金材料なんかにつかわれてんの」

ア「おまえがいばんなよ」

ク「うるせぇ、さびが」

じ「すぐ殴り合いの喧嘩すんなよ！！年頃の女の子がっ、ってあぁ、髪つかむな！頭突きはやめろ！！ぐーでなぐるなー！！せめて平手にしなさい！！ったく。でセレンは？？」

セ「・・・・」

じ「セレン？？」

ア「あぁ、じろぉがセレン泣かしたぁ～男として最悪だぞ。しねよ」

じ「しね？！そんな重罪っすか」

ク「セレンは同素体があって、むずいんやよね～。よしよし。せーちゃんは気にするな。気の利かないわっぱやねぇ」

ア「せーちゃんは、金属セレン（灰色）で光電池材料やガラスの着色に利用されます」

ク「はい！ここで問題。金憂は（きゆ）なんでしょぉ～？」

じ「金？？」

ア「はい。せーかい。金は酸にも耐えます。錆びません。何年経ってもぉ。ただし、王水は金をも解かします」

ク「んじゃ、これから会う予定の王水（おうすい）っていったい何のための人でしょー」

じ「えっと、」

ク「答え！！」

じ（聞いたんなら答えさせろよ）

ク「もし金憂が自ら創ったこの世界を何らかの弾みで壊し始めた場合に王水が金憂を壊します。金憂は『もし』、のために王水を創りましたとさ」

ア「未然に言っておいたから、この辺の事本人に聞くなよ。王水は金憂大好きだからな」

ク「セレンも泣かしたんらし、気ぃきかんのだから注意しろよ～」

セ「うぅ～・・・」

じ「ご、ごめんって。ホント、土下座しますんで」

息抜き（予備知識）（後書き）

という名前の由来（？）です
だからって、金憂や三人の神様は擬人化ではありません。
化学の授業の時に考えついただけれす。

突撃するようです。

追いはぎのような神様三人とえっちらおっちら、しばらく無言で山を登った。
アルミナとセレンは目を合わせようとしないし、クロムはセレンの言う所の『バイオなゾンビの様な動き』とかやらで果てしなくだれていた。
空も相変わらずオレンジ色だし、どれくらい経ったかは分からないがクロムが、

「あぁ、もうなんか全部がいやや・・・。世界一回滅べやこんちくしょう～Tウイルス作り出したろか！？」

と意味の分からん愚痴を零した頃にそこにたどりついた。
どう見ても、お城。
遺跡並の建築年数の、お城。
ただし、斜面を登りきって出てきたのはそのお城の裏手。大きな門の前にたどり着いたのではなく裏手。そこからぐるぅと回って正面に出てきたわけだが・・・。

「ちょ、なんでこっち側緩やかな斜面なの！？なんで整備された道があんの！？なんで俺たちはわざわざ急な方を登ったんだよ！」

「だって、じろのお家があっちだったし」

「なんでってて、こっち側は普通に山にも家在るから道が整備されてんの。ウチらが登った方が、崩れたほうだよ」

はぁ、なんか脱力。

『バイオなゾンビ』とやらが俺に移ったようなような気分。

「んじゃ、王水のトコに押しかけんらけど。二郎。剣抜いとけぇよぉ」

な、なんで・・・・？何か危険があるのか？？

大きな門をくぐって見れば、中の庭は外見から想像したモノと全く違った。

古城っていうか、遺跡に見えてしまう城の内部はきっと荒れてるんだろうと思ったのに。

綺麗に手入れされている。

ただ、何か変。

いや、大分変。

お城には入った事も無いから良くは分からないが。

庭もでかい事は外の厚いレンガの壁で分かる。

分かるんだが・・・。

「外から見たより、広くね？」

城壁無視して中が広すぎる。

壁の内側になんであんなでけぇ湖があんだろぉ・・・。

あはは、さうが神様だぁ～、

とかコワれかけていたら

「二郎～は、よ、こ！」

数十歩先の大扉の前で三人がブンブン手招きをしていた。

慌てて駆けつければ、さっきまで死にそうだったクロムが急に元気になっていた。

「おっし。行くぞ。ノックするぞ？準備えぇか！？」

セレンとアルミナが真顔に頷く。

王水なる人物は、いったいどんな奴なんだろ。

「じろ、いくよ？」

セレンがつんつんと袖を引っ張った。

クロムが、大きな両開きの焦げ茶の扉を叩いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3001f/

神様が家出してしまったようです。

2010年10月21日01時20分発行